

日根野中だより

令和5年10月20日発行 日根野中学校 校長 武田 博之

「いのち」をテーマに…

令和5年度も折り返し…毎年のことですが、新年度を迎えるとどの学校でも「力合わせて！…良い一年に！」を掲げスタートします。みんなの命・健康・安全を第一に取り組んでいく…「いのち」をテーマに！…そんな願いをもって毎年学校はスタートしています。

3年半続いた感染症拡大による自粛生活・行動制限…クラブ活動の制約など…。また昨年から続く本当に残念ながら、ロシアのウクライナへの軍事侵攻…また先日急変したイスラエル・パレスチナ間の歴史的な経緯からの紛争…それらが日々ニュース報道等で発信され、その惨状を見聞きし、心痛める毎日を送っています。「いのち」について考える…平和な環境に感謝…今まで実感をもって考えることがなかった…そんな考える日々を送っています。

「いのち」を守る…これは当然のことながらも「いのち」を輝かせる…「いのち」を磨くこと…。「いのち」を常に感じ、考えることのできる感性を高めていきたい…そんな思いで「集会」や「学級、学年、学校だより」「ホームページ」等で発信してきました。新型コロナウイルス感染症が5類に移行したからと言って感染が完全におさまることのない今…、直面する「いのち」との向き合い方…。様々な情報が飛び交い、そんな渦の中で様々な価値観が現れてくる…正にそんな時代…。自分は平和についてこのように思う…こんなことを常に考えるなど…誰も正解が分からない時代を今、自分たちは進もうとしています。私たちが今まで進んできた「覚える」時代から「考える」時代へ移行していく必要性を感じます。

新しい生活様式の中でどのような新しい文化、伝統、そこから生まれる価値観を創り出していけるのか。今までの前例にとらわれない発想のもと創造することが必要になってきます。生徒会活動の在り方…クラブ活動の在り方…行事の在り方…学校生活そのものの在り方…やり方が無数にある時代だからこそ、みんなで知恵を出し合って、よりいいものを創り上げたいと思います。

怒涛の如く、これからも突き進んでいく日々だとは思いますが、「いのち」を常に意識してしっかりと一人ひとりの心に刻み、受け止め、進んでいきましょう。

本当の学ぶ・考える…とは？

この3年半、新型コロナウイルス感染症との闘い、感染拡大の懸念から、学校もリモート授業で十分だという意見をよく耳にします。特に10代の感染者が増えた頃、何もわざわざ学校で勉強する必要がないじゃない？…様々なコメントターがあたかも分かったかのように話されていましたが、果たしてそうなのか…。

学校は勉強だけの場所ではない…。一人前の人間として生きていくための人間関係を学び、人間としての土台を作り上げる場所だということ…。パソコン相手だと、知識注入は効率よくできたとしても、社会の中で生きていくための「学び」は皆無に近いものがあると感じます。

人間が一人で学び、ひとりで考えられるようになるには、気の遠くなる様々な過程を踏まなければいけません。学校で言えば友人、クラスメイト、クラブの先輩・後輩、先生たちに正面から向き合ってこそ、初めて得ることができる…それくらい習得は難しいもの…。生涯通じて得られない可能性も大きい…そんな大変なものだと思っています。

「学ぶ」の語源は、「真似ぶ（まねぶ）」…「考える」の語源は「か+向かう」…。どちらも生身の相手に向き合ってこそ育つ果実…。パソコンの画面から何を学び、何を考えることができるのか…理解できない感じがします。

どんな時代になっても、人間は困難と向き合い、克服していかなければなりません。全力で人間に向き合い、その中で自ら学び、考えられる人間が、また来る新しい時代…人としての生き方を創造していきます。その人生の第一歩を提供する大切な場が「学校」であり、「友人・クラスメイト・クラブの先輩・後輩」であり「先生」であることは、どんな時代になっても…世の中がどのように変化しようと「揺らぐことのない真理」だと思っています。

学校の「場」としての存在意味…。これを、学校に関わる全ての方々に理解していただき、我々教員も再確認しなければいけないと考えています。

<心の風景…> 今できること…

今できること…がんばればできそうなこと…そんな小さな物事の積み重ねの先に大きなもの…成果があると考えなければいけません…先の事ばかりに気持ちを注ぎ、不安になってばかりいるのではなく、まずは足元の…目の前の物事に気持ちを注いでいきたいですね…

日常の中にある
「小さな出会い」と向き合い
その中から何かを学ぶ…という
心の姿勢」によって
人生は大きく変化します
心の感度が最も大事